



東京YMCA

2016 5 月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

西東京コミュニティセンター60周年

1955年に武蔵野ランチとして開設された「西東京コミュニティセンター」が60周年を迎え、会員による記念会が開催されました。

待たれていた記念会

60周年記念会準備委員会 並木 信一

「東京YMCA西東京センターの前身となった、武蔵野(1955年開設)ランチ開設から」記念会が4月16日(土)午後、国立駅南口の「国立商協ビルさくらホール」を会場に開催されました。昨年9月、有志数人が集って、理事の河本晶介さんを委員長とする準備委員会を組織して準備を重ね、開催にこぎつけたものです。今年、YMCAが「国立」で西東京センターを開設してから20周年でもあります。記念会開催の主旨は、西東京コミュニティセ

ンターの前身となった、武蔵野(1955年開設)ランチ開設から、昭島(65年開設)72年頃閉鎖)、立川(73年開設)96年国立集約)の各ランチ・センターで、メンバー、リーダー、委員、スタッフなど、時代や役割は違っても、共に活動し、かけがえのない友を得てきた仲間たちに、再会する場を提供すること。そして、現役の人達とも交わることで、再びYMCAの働きの支え手になっていただくきっかけを作ることでした。ちなみに、武蔵野、立川の活動の一部は、現在も西東京コミュニティセンターの中核プログラムとして継続されています。記念会のプログラムは、一部が記念礼拝、二部が懇親会、懇親会では、スピーチの他、ユーザーの活躍による現地の西東京コミュニティセンターの活動紹介や、みんなでキャンピングを歌う等、それぞれYMCAにおける出会いや体験を思い起こす、楽しい一時となりました。

た。礼拝席上献金の10万7219円は、西東京コミュニティセンターのために捧げられました。参加者は、現役のユーザーボランティアリーダーを含めて164人の多数にのぼりました。定員100人の会場は、はちきれんばかり。申込み期限後に参加を希望してこられた方は、お断りせざるを得ない状態で、駅近くの飲食店で行った二次会のみ参加を受けるといった具合で、二次会への参加者も116人となり、全体を通しては170人を上回る参加者となりました。多くは、20年、40年ぶりの再会で、互いを認識するのに関がりました。会場は旧友との再会を喜び姿で満ち溢れていました。この記念会が、YMCAに関わってきた多くの仲間からどんなに待たれていたのか、を実感させられる

野市から移転する時に、多くの市民、団体から残念が声が聞かれました。地域を構成し、地域や人々から必要とされる

の地です。2010年代にユースボランティアとして活動したメンバーを中心とした次の方々でした。

準備委員会は、「60周年記念誌」、「記念Tシャツ」、「木製ネームプレート」、「記念CD(60年記念誌、武蔵野、杉並、立川で作成したこれまでの記念誌、アルバム、各種資料などを収録した)」などを作成し、参加者のお土産となりました。

今回の記念会が、国立の地で20周年を迎えている西東京コミュニティセンターにとって、新たな歩みを踏み出す機会となりました。

赤三角

5月5日のこどもの日から始まる一週間は児童福祉週間とされている。1947年、この年は児童福祉法が制定され、端午の節句として古来より祝われてきた5月5日も祝日となった。子ども弱者に光を当て、彼らを福祉の対象とする考え方がようやく始まった年でもあった。しかし当時の現実は戦災孤児や家族と離れた浮浪児、占領軍兵士らとの間に生まれた婚外子など、都市は希望の光さえ見出せない子どもたちであふれていたと聞くと、69年が経ち、子どもたちの生活は豊かになったかに見える。が、一方でショックなデータが昨年明らかになった。子どもたちの貧困率が約15パーセントに達したという。ひとり親家庭では50パーセントを超える。食うや食わずの生活を強いられ、69年前の貧困とは異なる「相対的貧困状態」つまり所得格差が広がっている。給食でかろうじて栄養を摂り、学用品も買えず、進学もままならない子どもたちが6人に1人いる。格差による精神的ダメージも深刻だ。全国YMCAのチャイルドケア事業でも喫緊の課題として、このことが取り上げられた。私たちが彼らにどのような関わりや支援ができるのか、今まさに問われている。



再会の時 ～ 新たな地域活動に向けて ～

西東京コミュニティセンターの前身である武蔵野ランチは1955年、三鷹駅から20分ほどの武蔵野市西窪に誕生しました。全国のYMCAが1950年から「5か年前進運動」に取り組み、次々とランチが建設されていった時代に、江東、山手に続く東京YMCAの3番目のランチとして設立されました。寄宿舎事業のほか、住宅地にあるYMCAとしていち早く家族会員制度を作り、子どもや女性を対象とした地域活動を展開。フォークダンス、英会話、家族キャンプ、グループ活動などに多くの方が参加しました。

10周年当時は、「会員活動は会員の手で」をスローガンに、職員が1人しかいない体制にもかかわらず活動を広げ、65年には昭島センターを設立。各種講習会などを行ないます。72年には三鷹駅5分の地にプレハブ会館を作って移転。そこを拠点に73年には杉並センターを、76年には立川センターをオープン。活動エリアを拡大していきました。

78年に会館が新しくなると、地域諸団体との共働プログラムや障がい児のための野外活動など新たな活動がスタートし、会員は1000人超、ボランティアリーダーも200人を越えます。86年には日本語学校も開設されました。

40周年となる1995年、東京YMCAはここに福祉専門学校を含む総合福祉センターを開設することに決定。しかし武蔵野市の土地は敷地面積が不足するため売却し、新たに国立市に「国際福祉専門学校(現:東京YMCA医療福祉専門学校)」と地域活動を担当する「西東京センター」を開設。武蔵野と立川センターの活動はここに統合されました。2002年には、専門学校に作業療法学科を増設するため、西東京センターは国立駅前に移転。現在は子どもの野外活動や障がい児・者の活動を中心に活動しています。

(東雲児童館 佐藤健)

子どもに寄り添うということ

坪井節子さんが語る ーいじめ・虐待・非行の現場からー



坪井 節子さん

1980年～弁護士。87年～「東京弁護士会子ども的人権救済センター」相談員。2004年に子どものシェルター「カリヨン子どもセンター」設立。08年～社会福祉法人カリヨン子どもセンター理事長。

いじめ、虐待、非行。そんな子どもたちに向き合ってきた弁護士坪井節子さんが4月11日、東京YMCA午餐会で「子どもたちに寄り添うーいじめ・虐待・非行の現場からー」と題して講演しました。

どうなだれているしかありませんでした。そうしたらその私を見て彼はこう言ってくれたんです。「子どもの話をこんな一生懸命に聞いてくれる大人がいると思わなかったよ」。

でも、一人ぼっちにしないで一緒に考えてくれれば、子どもは自分の道をみつけ出して生きていく。もちろん一度死のうらみと死んだ子がそんなに簡単に元気になるわけではありませんが、うねりながらも、光の方を向いて立ち上がっていくんです。

えかねて母親が逃げ出すと、代わりに彼女が殴られた。「寝ている私に『起きろ』って言って殴りかかってくるんだよ。飲んでたビール瓶を方シヤンと割って、それを振り上げて向かってきたんだよ」。

それで、16歳でぼろぼろになって、代わりの彼女が殴られた。だがこの子を責められたかと思いましたが、だれがその子を責められたかと思いませんよ。なんでこんなことになるまで子どもが放り出され続けなければならぬのか。少年審判をやっているときに苦しい思いをさせられます。私はどうしていいかわからず追いつめられました。「売春や覚醒剤は自分を傷つけることですからやめましょうね」なんて言おうものなら、「あなたに関係ないでしょう」。そう言われれば、やっとなんか決意して彼女に言ったのは、「私は、あなたに生きて

てほしいって願ってるから、それだけは信じさせて」。本当に恥ずかしかったけど、そう言うしかなかったんです。彼女は「この人、何言ってんだろ」という顔で見てました。

「近くの公園にね、夜と子どもは生きていけない。中学生の男の子が来てシンナー吸ってるんだよ。母親は男と逃げちゃって、父親に暴力ふるわれて。だから私、『シンナーはやめな』って言って、毎晩うちで御飯食わせてるんだ」。

子どもは生きていけない。一つ目が、「生まれてきてよかったね」。本気で自分に生きてほしいと願ってくれる人がいると信じられるかどうか、それが子どもの生死を分けることがあります。

道で自分歩く。それが人間の誇りということだと思います。激増する虐待、いじめ。そんな問題を目の前にして、私は何もできません。でも、せめて出会った子どもの話を聞いて、一緒に居るおろし、生きてほしいと祈り続けることくらいはできる。この三つの人権を子どもたちに保障してあげること。そのときに子どもたちは勇気をもって、立ち上がっていく。子どもたちに教えられたことが、私の希望になっていきます。(文・広報室)

【講演より】

「子ども的人権救済センター」に寄せられる相談は、想像を絶するような世界からのSOSです。あまりにも深刻で、私が解決できるようなものではなく、これまで何度も逃げ出したと思いましたが、

「80錠飲めば死ぬると書いてあった薬を、僕が50錠飲んだ気持ちがある？ 死にたかったんじゃないんだよ。でも、毎日地獄のように苦しかった。だから五分五分に賭けたんだよ」。

彼が自殺を考えたときに何より腹が立った言葉は、文部省のカードに書かれていた『死なないで、子どもたち。死ぬ勇気があるのなら、いじめに立ち向かえ』だったと思います。「死ぬのに勇気なんかいらぬんだよ。いじめに立ち向かえないから死ぬんだよ」。

私たちが子どもをこの世に連れてきたのは、彼を一人もいじめた人はいないから、彼の前でおろなく、彼の前にあつた

東京YMCA高等学院とオープンスペースi by(リビ)の主催で3月5日、東京YMCA山手センターを会場に講演会を開催しました。今回のテーマは「様々な違和感を持つ子が共に過ごす場を作るために『支援者』ができること」。

養護教諭、保護者、YMCAスタッフが語る

「空間作り」

「性の中で」

「子どもの人権保障とは」

「保護者・家庭からの視点」

【事例】いじめ

私が出会った少年は、有名中学校の3年生でした。ようやく合格をした中学校でいじめにあい、

どうなだれているしかありませんでした。そうしたらその私を見て彼はこう言ってくれたんです。「子どもの話をこんな一生懸命に聞いてくれる大人がいると思わなかったよ」。

でも、一人ぼっちにしないで一緒に考えてくれれば、子どもは自分の道をみつけ出して生きていく。もちろん一度死のうらみと死んだ子がそんなに簡単に元気になるわけではありませんが、うねりながらも、光の方を向いて立ち上がっていくんです。

えかねて母親が逃げ出すと、代わりに彼女が殴られた。「寝ている私に『起きろ』って言って殴りかかってくるんだよ。飲んでたビール瓶を方シヤンと割って、それを振り上げて向かってきたんだよ」。

それで、16歳でぼろぼろになって、代わりの彼女が殴られた。だがこの子を責められたかと思いましたが、だれがその子を責められたかと思いませんよ。なんでこんなことになるまで子どもが放り出され続けなければならぬのか。少年審判をやっているときに苦しい思いをさせられます。私はどうしていいかわからず追いつめられました。「売春や覚醒剤は自分を傷つけることですからやめましょうね」なんて言おうものなら、「あなたに関係ないでしょう」。そう言われれば、やっとなんか決意して彼女に言ったのは、「私は、あなたに生きて

てほしいって願ってるから、それだけは信じさせて」。本当に恥ずかしかったけど、そう言うしかなかったんです。彼女は「この人、何言ってんだろ」という顔で見てました。

「近くの公園にね、夜と子どもは生きていけない。中学生の男の子が来てシンナー吸ってるんだよ。母親は男と逃げちゃって、父親に暴力ふるわれて。だから私、『シンナーはやめな』って言って、毎晩うちで御飯食わせてるんだ」。

子どもは生きていけない。一つ目が、「生まれてきてよかったね」。本気で自分に生きてほしいと願ってくれる人がいると信じられるかどうか、それが子どもの生死を分けることがあります。

道で自分歩く。それが人間の誇りということだと思います。激増する虐待、いじめ。そんな問題を目の前にして、私は何もできません。でも、せめて出会った子どもの話を聞いて、一緒に居るおろし、生きてほしいと祈り続けることくらいはできる。この三つの人権を子どもたちに保障してあげること。そのときに子どもたちは勇気をもって、立ち上がっていく。子どもたちに教えられたことが、私の希望になっていきます。(文・広報室)

講演会の詳細は、高等学院の実践集「虹色のピント」にまとめられています。ご希望の方には差し上げます。電話(03・3202・0326)。高等学院まで。

様々な生きにくさをかかえた子どもの居場所

“支援者”ができること

■空間作り

居場所を作る上で、家具の配置やレイアウトは大事です。養護教諭の久能木さんは、「保健室という場には、少し居場所感覚で、隠れた的なスペースも必要だ」と話しています。生徒たちは、壁際にあるソファや角っこ椅子など、自分たちで居場所を探し、そこを基地として、そこから教室に行くということもある

■交わり、関係性の中で

次に、居場所に関わるスタッフとして、日々感じていることが話題となりました。オープンスペースi byは、「どこにいたかたが居たいんだ」という場ですが、カフエなどと違うのは、来て

■保護者・家庭からの視点

山岸さんは、上のお子さんが小学校のときに突然学校に行けなくなっ

「近頃の公園にね、夜と子どもは生きていけない。中学生の男の子が来てシンナー吸ってるんだよ。母親は男と逃げちゃって、父親に暴力ふるわれて。だから私、『シンナーはやめな』って言って、毎晩うちで御飯食わせてるんだ」。

子どもは生きていけない。一つ目が、「生まれてきてよかったね」。本気で自分に生きてほしいと願ってくれる人がいると信じられるかどうか、それが子どもの生死を分けることがあります。

道で自分歩く。それが人間の誇りということだと思います。激増する虐待、いじめ。そんな問題を目の前にして、私は何もできません。でも、せめて出会った子どもの話を聞いて、一緒に居るおろし、生きてほしいと祈り続けることくらいはできる。この三つの人権を子どもたちに保障してあげること。そのときに子どもたちは勇気をもって、立ち上がっていく。子どもたちに教えられたことが、私の希望になっていきます。(文・広報室)

熊本地震、緊急支援募金 ご協力お願い

4月14日から熊本県で発生しているマグニチュード7.3を含む連続地震では多くの方が犠牲になり、また避難生活を余儀なくされている方々が多数おられます。不安と悲しみの中にある方々に、心よりお見舞い申し上げます。



益城町の体育館で (写真:横浜YMCA)

さて、マスコミでも度々報道されております「益城町総合体育館」および「御船町スポーツセンター」は、熊本YMCAが指定管理者として運営している施設で、現在1200人を超える方が避難しています。また県内に14カ所の拠点を持つ熊本YMCAも被災している状況です。

YMCAでは全国各地からスタッフを派遣し、熊本YMCAと協力して避難所の運営・物資支援などの緊急支援活動を行っています。

東京YMCAでは全国のYMCAと協力し、緊急支援募金を開始します。一日も早い安全の確保と復旧のために、皆様の尊いご支援とご協力をお願いいたします。

【募金期間】2016年6月30日まで (予定)

【募金用途】

お預かりしました募金は、特段のお申し出がない場合、日本YMCA同盟を通じて以下の2つのために用いられます。

- 1. 被災地の復興支援全般
- 2. 熊本YMCA再建・運営支援

*1もしくは2に用途を限定ご希望の場合はその旨お申し出ください。

【募金方法】

◆東京YMCAの各センターでは募金箱を設置しています。

◆お振り込みの場合は、

みずほ銀行 神田支店 (店番号108) 普通1123669

公益財団法人東京YMCA

*振込時には、お名前の後に「クマモト」とお書き添え下さい。

【お問合せ】東京YMCA会員部

Tel.: 03-3615-5568 FAX.: 03-3615-5578

メール: kaiin@tokyoymca.org



障がい児親子 バスケットやテニスを経験 「ドリリームキャンプ」

肢体不自由児とその家族を対象に3月30日、高尾の森わくわくヒルレッジで、日帰りの「ドリリームキャンプ」を実施した。春の陽気の中、15家族37人が参加。パラリンピック出場経験のあるアスリートの指導で、午前中は車いすバスケット、レース(陸上競技専用の車いす)、チェアスキーを、午後には車いすテニス、ボッチャを楽しんだ。

朝は緊張気味で表情の硬かった子どもたちも、とにかく明るく楽しいアスリートの指導にどんどん引き込まれ、瞬間に笑顔が溢れた。ボールを持つこと、そのボールを

持ちながら車いすを操作することなど、1つ1つの動きが難しい子どもたちも、楽しくチャレンジしてきたことで満足し、自信を付けているようになった。また、その様子を写っていた保護者もとても嬉しそうであった。

昼食は外の原っぱでみんなで行った。キャンプソングを歌ったり簡単なゲーム大会をしたり、また野外炊き場場でホットドックや焼きマッシュマロのおやつタイムを設けたりと、盛りだくさんの1日を満喫した。

東京YMCAは、2014年度より三菱商事株式会社と共催で月1回、

発達障がい児を対象に親子でボール運動や水泳を楽しむクラス「ドリリームクラス」を開催している。今回は、肢体不自由児を対象としたキャンプだったが、障がいの有無や種類によらず、誰もが

運動できる機会を持ち、そして運動を楽しむことができる社会を目指し、引き続き三菱商事株式会社と共に活動を推進していきたいと思う。

(山手コミュニケーションセンター 大津桃子)



中村孝誠実行委員長(右)と優勝した市崎俊一さん

チャリティーゴルフ大会 障がい児等支援へ113人参加

第26回チャリティーゴルフ大会が4月14日、千葉県成田市のレイクウッド総成カントリークラブで開催された。当日は朝から本格的な雨が降っていたものの、プレイが始まる頃には小降りになり、肌寒い曇り空の下ではあったが遅咲きの桜を眺めながら、30組113

人がプレイを楽しんだ。プレイ前後にはチャリティープロによるワンポイントレッスンがあり、希望する方には一層腕に磨きをかけていただいた。コース途中ではチャリティーホールを設けて、多くの参加者に募金協力をいただいた。表彰式では、多くの企業、団体、個人から寄贈いただいた数々の賞品が入賞者に贈られた。

大会の益金約46万円は、障がい児支援、不登校児支援、フレンドシップファンド、国際協力募金、東日本大震災復興支援に用いられる。参加くださった皆様、ご寄付やご献品をいただいた皆様、準備に当たった実行委員の方々に心より感謝したい。

(会員部 小松康広)

「うまく言えそうにもないけど、いま、おなかの真ん中に、確かにあったかいもの持ってる。まっすぐに伝えたい。いろんな偶然が重なって、ここにこうしてあなたと一緒にいられることが、ただとてうれい。ラララ、ね、おしいちゃんになっても、ね、おはあちゃんになっても、ずっとずっと一緒にあったかく、付き合っていたいね、ね、ね」(高橋はゆみ作詞)

日本YMCA同盟の調査で、全国のYMCAキャンパーに最も好かれていたキャンブ・ソングの第1位になった「ね」で

す。子どもたちはキャンブの感動を歌に乗せて持るといいます。泣きやち続けます。「あなたと一緒にいられること」の喜びを直感的に感じる子どもの感性に拍手を送りたいと思います。

バーチャル・リアリティ元NHKアナウンサー

一緒にいられる喜び

イ(VR)は「仮想現実」のことですが、今私たちが多くは仮想現実に取り囲まれています。「スマホ」という言葉が聞かれました。子どもが家に帰ってきた時に親がいなくてもスマホが

「お帰り」と迎えてくれるというのです。泣きやまないうちにもスマホの音が響く。人間のつながりがないと、人間になれない子どもが続出する危険が大きい。子どもたちは壮大な人体実験の中にいる」と言っています。「人体実験」の失敗の責任は、親子自身ではなく子どもたち自身が取ります。YMCAキャンプには「仮想現実」ではない「実体験」が大切にされています。今年も夏もYMCAはさまざまな実体験の機会を用意しています。

(総主事 廣田光司)

ここで言う「ランチ」とは、東京YMCAが、神田美土代町の「本館」とは別に設けた活動拠点である。でも、「分館」と呼んだことはない。広



資料室の窓から(94) ブランチ委員のはじめ

東京の各地域にふさわしく、個性的な活動展開を期待した「小さなYMCA」である。地域に潜在するリーダーシップが表に出る場となった。

東京YMCAのはじめのランチは、1950年暮に江東区石島町に生まれた。「東京YMCA江東ランチ」である。今日の「江東センター」の前身である。開設構想では、「本部」の指示で動く「出先機関」ではなく、活動方針も展開も現地の「ランチ事業委員会」が決める。館内での学習からキャンプまで、幼児から高齢者に至る全年齢層に及ぶ総合的な「活動拠点」であった。したがって、「地元選出」の「事業委員会」は個性を發揮して、「YMCAの輪郭」を広げた。この東京YMCA最初のランチ事業委員の名を長く記憶したい。1950年12月16日、東京YMCA理事改革継承を示す日々は続く。

齊藤 實 本会元副総主事

（総主事 廣田光司）